

幼児期の体育遊びにおける社会的行動に対する教師の関わり —教師特性による関わりの比較を通して—

スポーツ文化研究領域
5016A020-9 近藤 広貴

研究指導教員：深見 英一郎 准教授

【序章】

文部科学省（2005）は、近年の幼児の育ちについて、他者との関わりが苦手であり、自制心や耐性、規範意識が十分に育っていないなど社会性が十分に養われていない現状にあることを報告している。

幼児期は、運動機能や言語機能の発達により他者との社会的関係が現れ、社会性の基礎を培う極めて重要な時期であり

（Premack, 1988）、この時期に社会性が養えていないと児童期以降の小1プロブレムやいじめなどの問題につながる可能性がある（新保, 2009, 本間, 2011）。

現在、幼稚園等教育施設で行われている様々な遊びの中でも、体育遊びは、ルールを守り仲間と協力するなど他者との社会的交流の機会が多く、幼児の社会性育成に欠かせないものであると考える。また、幼児がルールを守り、他者と協力して体育遊びに取り組めるようにするには、体育遊びを指導する教師の関わりは重要なものであり、このような教師の関わりはそれぞれの教師がもつ特性が大きな影響を与えることが指摘されている（梶田 1988, 中井 2003 など）。

しかしながら、体育遊びの場面において幼児が適切に体育遊びに取り組むために、教師は具体的にどのように関わるべきか、また、それぞれの教師がもつ特性により関わり方にどのような違いがみられるのかについては明らかにされていない。

そこで、本研究では、幼児期の体育遊び場面における社会的行動に対する教師の関わりは、教師特性によりどのような違いがみられるのかを明らかにする。また、幼児を社会的行動に意識づける教師の具体的な関わりを明らかにすることを目的とする。

【第1章】

第1章では、幼児期に求められる社会性とそれを育成するための課題、幼児期の体育遊びにおける社会性を育成するための教師の指導に関する先行研究の検討を行った。

第1節では、保育所保育指針解説書（2008）と幼稚園教育要領（2008）をもとに幼児期の年代ごとの社会性の発達と幼児期に求められる社会性を明らかにした。また、幼小連携での課題である小1プロブレムの問題から幼児期に求められている社会性が育成されておらず、幼児期の社会性の育成は早急な課題であることが明らかとなった。

第2節では、体育遊びにおいて、社会的に適切な行動がとれるようになることにより、社会性が育成されていくことが明らかとなった。また、幼児期は、自己を抑制したり、ルールを理解することが十分でなくトラブルも多く現れるため、教師が遊びに入って、自分たちでトラブルを解決する方法を伝えたり、ルールのわからない子どもに対して丁寧に関わって理解できるように

することで適切な行動がとれるようになるなど、教師の関わりの必要性が明らかとなった。

【第2章】

第2章では、幼児期の体育遊びにおいて教師特性が関わり方に及ぼす影響を明らかにした。埼玉県内の3つの幼稚園に勤務する12名の教師の体育遊び各2回（計24回）を対象に教師行動を観察した。

教師の関わりは、教師歴によって励ます、指示する、注意する、その他の関わりにはあまり違いがなく、教師歴が若手教師、中堅教師、熟練教師と上がるにつれて、承認する、確認する、説明するの項目に有意差が認められ、関わりが多くなっていくことが明らかとなった。また、保育観による関わりの違いは、子ども中心保育観の教師の関わりは教師中心保育観の教師の関わりと比べ、承認する、確認する、説明するの項目に有意さがあり、関わりが多く、教師中心保育観の教師の関わりは子ども中心保育観の教師の関わりと比べ注意するの項目に有意差が認められた。

【第3章】

第3章では、2章で対象とした12人の教師のうち、教師歴に差があり、保育観の異なる2人の教師の関わりの事例から、幼児を適切な行動に意識づけるための関わりを明らかにした。

運動を行う前に運動のやり方やアドバイス、ルールや約束事に関する説明を行い、加えて、幼児に対して自分のすべき行動を問いかけ、確認し考えさせることにより適切な行動がとれるようになった。

また、幼児が不適切な行動をとった場合、直接注意するのではなく適切な行動をとる幼児を具体的に承認することにより、幼児の関心を引き、体育遊びの雰囲気を悪くせず不適切な行動を変容させ適切な行動がとれるようになることが明らかとなった。

【本研究のまとめと課題】

体育遊びにおいて幼児を社会的に適切な行動に意識づけるためには、

1. 運動のやり方やルール、さらには約束事に関する説明。
2. 幼児自身に自分が行うべき行動を考えさせるための確認。
3. 不適切な行動がみられる時に周りの適切な行動をとる幼児に対する具体的な承認

が重要になり、それらの関わりは、若手教師、中堅教師、熟練教師と教師歴が長くなるにつれて関わりの頻度が多くなることが明らかとなった。

また、教師中心保育観の教師ほど幼児をおもい通りに動かそうとしすぎて注意が多くなり、かえって不適切な行動が増えてしまうのではないだろうか。子ども中心保育観の教師は賞賛や確認、説明の関わりが多く、子ども中心に関わりを行ったほうが適切な行動がとれることが考えられる。

本研究の課題として、1つは12人の教師に行ってもらった体育遊びの内容がばらばらであり、統一する必要があること。また、もう1つは、幼稚園での生活全体で育まれる社会性を体育遊びに限定して検討した点があげられる。